

連載：[海外] グローバル体験

第5回 米国 エンジニアとテクニシャン

研究員 杉本 晴重

思考に徹するエンジニア

1970年代、アメリカ現地会社で仕事を始めると、日本と色々違う事が多かった。その一つに職種があった。

当時、日本では技術系と文系で職種が分れ、技術系には「技術」とか「技能」とか職種名がついていた。一方、アメリカで仕事を始めると、エンジニア以外に、テクニシャンと呼ばれる職種を持つ人達がいることが分かった。

テクニシャンはエンジニアの補助をする人で、例えば、実験回路の作成や機器の準備、データ取得やデータ整理などをエンジニアの指示で行う。すなわち、テクニシャンが実働作業を分担するので、エンジニアは思考に徹することが出来る。それだけエンジニアの役割は重要で、地位も非常に高かった。

一方、日本では、技術者といえども、特に若い内は自分で実験回路を作り、実験しデータ取得や整理、評価するのが当たり前だった。やはり実作業を経験しないと良いアイデアも出ず、問題解決も出来ない。アメリカの考え方は、合理的で優秀なエンジニアの場合は有効であったが、エンジニアが駄目だと、テクニシャンを使いこなせず、仕事が進まないこともあった。

現場力重視の日本製造業の強さが、このようなところにもあるのかと思っていた。しかし、実際は、エンジニアもテクニシャンも様々な企業で様々な経験をし、鍛えられている人が多く、エンジニアも実働作業の経験豊富な人が多かった。

社会的評価が高いエンジニア

アメリカではエンジニアは、社会的評価も高い高級専門職であり、テクニシャンの仕事が出来ても、してはいけないのである。エンジニアもテクニシャンも必要な時は、あらたに中途採用することがよくあった。

日本では、「大学を出てもすぐには役に立たない。ある期間、教育、研修が必要だ」とよく言われるが、アメリカでは、採用した人は採用した日からすぐに実務が出来る、あるいはさせることが当たり前だった。これも、人材流動性の高いアメリカでは、職種内の競争が厳しく、キャリアパス向上に対する意欲も高く、勤務外に教育訓練を受ける人も多かった。

ところがテクニシャンの給与は時間給で残業が付くが、エンジニアは大学出たてのヤングエンジニアを除いては、全て年俸制であった。給与の高いエンジニアは、原則として安

いテクニシャンの仕事をしてはいけないのである。

日本では、技術者でも管理職でないと残業が付く事が多いが、最近、一部の高級専門職は年俸制になった。日本でも、技術者がプロフェッショナルとして、もっと高く評価されるようになって欲しい。